

911.3  
八  
乾

俳諧芭蕉泥

乾

主計の事はみれかとすまつて御室  
往くおもひて、かへて御室の  
事は、御室の事は、かへて御室の  
事は、御室の事は、かへて御室の  
事は、御室の事は、かへて御室の  
事は、御室の事は、かへて御室の  
事は、御室の事は、かへて御室の  
事は、御室の事は、かへて御室の



萬万もいふはまくわが経のうる

まくわのむかひ乃様は

せらきとほくやがゆくさまのおも

じくさくとくとくとくとく

まくわのゆくゆくゆく

湖東美松人西溪

故實 予初學古時より俳諧のほとちうすが穴拂とぞ  
は風子大林句松李常おもふ是に極めて其外の事  
きづくおよきを志すとすは扁毛先生作の歌  
手すとも傳ふるえりと云ふ

一部七三先生ハ俳諧上達を用ひたるや左東日是公年はと  
因ひ移りてたゞにたゞにあらすハ古式を取一筋ふ  
事もありとれど松子ら疏りをありホ一先師カ俳諧者  
是野毛以後の俳諧を以てえど一筋りを昌代の俳諧家  
主として移り凡俳諧者各自ハ既よりとつて

故實 予初學方時より俳諧の道をもとよりが大搖とせん  
は成る大搖の歌季節书も未だ経験して甚ずの事  
きつゝおとづれをもつてよしもは無きえ際の如頃  
至りとも傳ふるえへ給ふと記矣

一卯七云先づハ俳諧之法を用ひ得テヤ玄東曰是公筆也と  
用ひ得ヒテナリミタナリハアモトハ古式を取リ一稿  
事もアリシルト松井翁も殊リ也アリモ一先づ大搖業も  
是翁也以様の俳諧を以てえども一稿リ也只伊の俳諧業  
毛利も此を元俳諧を以てえども一稿リ也只伊の俳諧業

連例得を多めに長改めあらう。まほ式か一例で  
連事の式をかくと用ひてはまえ例得がたは式を改めかくと  
やもなじてみ上より主ては式もあくも若葉人びくと  
まこと接する事も思ふ。其時力ある連達ハ皆をまよ  
あくと更に連事のは式をかく用ひらむとあり且つもあくと  
とりれ先づあまきはよん便さを連事にまくと例得がたは式ハ  
別小立魚トシ一人を例得とて至るの奴僕力すとおまく  
失脚のば法ハ多くあり。

一和七日舊門小まえまめの船あるがま三と用ゆる事ハ  
ち東云々を接する事上トセもと連事が至例と云一例に

やもなじくはうねんとあちトのちにまわると、いぬ  
あくと一々まつるとつむハ連事の法せらむと、ま事のほよ  
よくと等下の句記してはもすと、此例得のアムナムト  
ち山乃へちこさう——本ノマ小さう

たとえりあらじせきひ子を

ほとこ川を水を洗ふあらうる  
かくアホトモヤ人乃アラクシ

一和七日舊門小まえのうねんと、ち東云々をまわる事  
あり無げきを以て二字を失ふ曰あくも四まづくあくと

西山をかうくはうれんうまえじあち下のちにまゐとへぬ  
あらわし一々まつめとつむハ連房乃活也うれハ至美のほよ  
よもよも等下の匂此云活もすうじて御宿の所をもす

ち山乃へちこさう一一年ふきうち

本ノマ

たるきりあひし坐ひひそむ

浦をこ川をゆゑを出しあうとくる

かくマアシヤ人乃アラシ

まくまくあまゆの船舟待つし半三もおね

一あ古云舊門小喜喜の匂氣り行くや左平曰毎季の匂ハお  
あり無れ多事を失ふ日暮も四季のくわう事

惠能名に教ふる所をかくすありかきをばらうすれと  
ひうねうせりあうて四まのうちを甚しき事とづらむはれ  
あうれさんそもよがまくもじゆをありへり禁止せらしと  
甚しき事とすを二つあるハ云はばなまえ事とてんじてま  
れ

一 座主記而再手

あけあくをねつをゆと座馬引 番

何んれく坐ぬれもありねぢち 桃風  
みゆゑを坐ねりとこも一かに坐とぞはありく車いハ  
車足とも名ふともえひあり

年（や様）ふくせしる様内面 番

かくのあくをあり

一 和七日坐ぬに切まつことひふぢ來日五あり先師曰汝初  
まきひりやま來ニあ伊豫那（只ゆひに生人怪）一傳  
先師曰「ふぢ來日たゞも坐ぬハ一矢木のあく」とてても  
梢根あり附ぬハぬあれまく坐すより坐坐ぬに北極へ先師曰  
志うて志うてもまく坐ぬをちうるやめに是を修教す  
ゆきゆきうき連俳とひぬく極を夢う人に傳うくと  
と歌うて先師エヨリとまくと「さむ縁を」と  
あゆきゆき力もく能く甚うきまくとまくとまくと  
き一言ゆきうどひくとゆくを先師エヨリとまくとまくと

やう白ああこ力在は直見じを  
一也てゆを率ひらは三段の量を何加テモ一也名回り  
て作接うと都合ス文多同先にゆ曰あき三子一もすく想  
文多様入室又或人同先昨日かまふ用され因之四十半身和  
ちく不用御ハ一もとゆまく一也くハ皆多とある  
謹みよと多がゆ一也くありな也日也一也く  
吉不曰此子をもとしに用口をもとしも無もとあり

人三さん五五とおもへる穴猪突跡ち私  
魚きつてもあらぬは先後傳接ち何から  
石策下すもろもろあらむたれ一也くよと  
えひ行ひ也

一和七多花小字を多めやち東云先昨日多子言多を一也  
力白多經白やナセ白圓おうりくもれと多行うとせ  
南流すを北流を用ひ和七日多を引あケト傳うハ  
吉來日引あらんニふあり一、一産業教すき人あり  
其人少云を多びはち句あふありあると妻妻と牛  
て本と空ひし事と生牛の本とアユツト一也の矣

ましゆくゆうすなづりはまきみかわらかもかくじの書  
ちたえせ蓮ゆゑおれをまくはまとへまきなにせ  
ハ毎くわゆく疏ニミ入てあまくらむ白ありみくべて  
ゆる白ああこ力有る或きはやハにあひのやけへ、至る  
一ノモキモ率ハシハ三段御是を何ゆうも一ノ名固  
て併持うと聲くと丈も同先昨日かまく用氣四十八事和  
丈も持入立又或人同先昨日かまく用氣四十八事和  
事く不用角ハ一ノモキモやまくとくふくハ等もとまく  
萬よつ事がく一ノ段くありたれど也とくふく  
さへと吉不曰此子をもくしに用口もくしに御もとあまく  
まく

人三くん五くともかくはく火猪火附力極  
魚きくもあくにほ先後併極力固くも  
石筆下すもろもろあくとてねとてねとよ  
まく

一和七三花小室をまくやまく東云先昨日かまくと  
カクも經くやナセウ日おうりくもれとあくとせ  
南流をまく北流を用く和七日多き引あケテ併ハ  
吉不曰引あくに二ふあり一、一産業教すき人あり  
其人少云をまくはくとあくとありと善事と半  
て云をまくはくと善事の本とスツと一の巻

切若きとハ御子ゆづるをき人もあくまでも能もとあらば  
呼出一をかげて不を仰せ又はひの時を二つに二つにしめ  
うめ うめを辞退すなりもいりてみても川あたて  
仰も也あらもなく不を呼出モハ呼出モもとて過かく  
名を地羅かあらじニ瓦もねく引揚々ハシルンノハ化者  
ナリキテうのまハ傍のちうの才セ孝死せむかを鬼も  
角もまき 一人死モかゆム不ありテルモ云一句とあす  
人丸にはあ と云ふもとあすうてむを云うと云ふ  
一和七日様萬手本を様小かく御ときよまち東曰け付  
不をさうしたかつて先作曰直もひふすま東曰凡不

様かあらもと二五一遍ハ云うておひら木丸せじう  
も云や、あらうよふふやうねうとんすもすらあう年支  
番をさうとひのくれや ひとかりひうらく先作曰ア  
モ上古人ハ四半のうち一を主様ありはうはもなうう小  
おうに免を角も仰モトトアレと云ふ事のこううそと  
か一まう詫をうへとせす奈様もと一とく峰ボリナウセ  
セトトアレと云ふ事にせひきり

一和七日萬門兵を一とくも持るべく云ふ事曰予はまう  
事の間をすがり仰せ曰ハ思ひぬね事を勃以降ニ白  
事上五句とあら是種式の法也一とくも持るべく大細の

機ハあリモトシ一通アハモテカタヒルネカセモト  
モシヤアハモナトシハシハヤアハモトシモトシハアリ年ミ  
三ツ井モニシモトシハアリ事アトシアリヒシムシ先シ作シ日ア  
モシ古シ人ハ四シ季モのシ一チ季モ極アリシテシはモ在シタシ小  
ホシニシ急シをシ庵モ住モトシアリテシ享シ幸シのシうシモト  
カシまシ往シモトシハアリ事アトシアリ候シ不シトシ少シ  
モシ一チ季モ小シトシアリシアハシヒシ候シシア

一和セシ日暮門参モト一旬間モ持シムシ於シ日ハシシ一日中モ休シシア  
事アトシ向シテシ子シ女シ日ハシシハシ事アトシ向シテシ休シシア  
事アトシ上シ事アトシ有シ是シ於シ式モ行シセシ一旬間モ持シムシ於シ大シ切シ

裏句に接する所へとて一役よ志を清め和合をも  
かねて一句かへ接する所へとては大むふゆぢり  
而や子うるもかへ接する所へとては大むふゆぢり  
あらまちうけく 一言を志一句かへおみれ也若然あら  
うれりあらかへのせり又五十韵百韵といても其の取引  
一言とよきこもた 一言とよかくもくと大むぢり  
三番藍句にあいと信二句一四出小文字章とへて是  
中意句繰し又まくは藍句より句あらひおもく一言を  
出あすかくは藍句より出をよかく時ハニカツ五句と  
玉手一言かくはん時を経てかくとも一句かくも接しと

きうちあかく三才門とも生ほの能く五句も度と出上  
すとおもく處や勅の上あかくふとどもあく不妙され  
うもうれ連系からくみく例説の上あくねも度と出  
やもあくすがくも古人の罵人たまごとあみふとせた  
後多力仰よかくはるを思ひ終ひ

一や七日差の子房をまと目に用ひ終ひやま車日坐すあら  
酒堂海川の子房をまと目に用ひ終ひ先河田子房は勺中に目  
あらかに自の子房をまと目に用ひ終ひかうと一とて子房を用ひ  
子房をまとめとおり子房を用ひ

まづちかくうわにとも生ほの能く五右もすこせ  
すとおもて居や勘の上むかくつまむるもふかく  
よもよしれ連考かうゑく例説の上あくねそせきを  
やもあくすがとも古人の罵人たまごをやめしをせき  
法事方仰よかんことを思ひ仰らぬ

一や七日並の子育金と自に用ひ仰るや左東口せうあ  
酒堂海川のうふすまアヒキ出アリ先河田方寫ハ向中に自  
あれハ前に自のひ仰さんハねうそーと西千角子用ひ  
まく書コ自とんまくも、ことと自法かうのまを入ら  
と、うちさもまうひとをもおもすくま屋外玉りまく

宵冥北匂出の予曰先づ改子計をうへし上をハ  
清小笠りんと是ノ六月に用ひ候はばに许六九書である  
か先づの予ノ事と自と一候トハあらずともすむすなも  
まえくらと併乃處而く自に用ひ候もあよ／＼きよ／＼け  
一予を坐て仰そ／＼たゞモ許六九源川九云候や／＼あ

## 予ゆあれ屋

一聖波曰在民力乞す乞すと秋奉とぞは嵐雪ニテ被ヒ  
先師曰乞ひ秋奉といも此日秋祓ハアリトとく予充  
角といもん風をあめにけ／＼そ／＼風あ／＼ヘ一句  
小秋奉乞と云々改玉乞といし秋奉が／＼中えと

## よれかあ／＼ハとふ事

蛙夕私曰乞ひ梵禮也來くハ孟芽乞と云御子量  
多經あり秋奉モお達り序内に重ひて秋奉を  
ナぬう終ひ

一玄末曰許ちとクノ自ノ四カ月と清毛予ハ一八月十九  
日アラ委宿也清毛を用ひ牛ニ私焉みと日清毛清毛と  
よ／＼す／＼牛ニ云々亦モ私ノ力多あり牛四七頭九九アリ  
事義ユカリトモかく兩ル所とあり牛ナと木ニ玄末  
多メとあう／＼牛ニ牛五牛五清毛多切キテモ多メ  
物の多ナチテ多々／＼牛ニ牛ニと云許六日四月とハ自ナホ

トシテシモアラモハトシテシ

蛙タ松曰金モ梵語也東ノハ孟芸金トモ幻十羅  
多經あり歌茲モおまツ草序カニ蓋モ歌茲を  
ナムテシ

一玄末曰許六と名自古四カ多ミト詩モ予ハ半一八月十九  
日アラ委宿也ほのれを用ひ半ニ私房カニ自古ほのれと  
ナムアリ半ニ私房カニ私房カニナムアリ半ニ半ナカナアリ  
事義ユカリシトモカクアレルトアリ半ナビト不ニ半ナセシ  
事義シトモカクアレルトアリ半ナビト不ニ半ナセシ  
物ナシナカナアリ半ニ半ナセシ

とハ和琴の絃核を以て歌ふハ良直の自力にて之名も子  
四のまうち未達と二つは福正極を云ひ月が新を  
ひそ中秋の自力低音を放歌あらうと自に四のまち  
の事必き

一許六日村山に至れり——まよを跡ふかくあり然此  
處の心事——（おもて）——を承きらむ——以てソシ  
焉乃志——（ぬきのせ）俗なりち来日多くはあれど  
秋の事すかもよしむる——（お人々）等に必ずも目すむふと  
うり妻乃子情あれど——（お主）様うとも殊ひ多難  
多難や——（ちゆう）往きをうきく怪退ておひづきをきくと

夫て一休爲めちうにそぞる身業を知り——（おへり）とぞ思  
フ——（おまえ）をうかぐるをうかぐる

桂夕松曰——（おおみわ）おたまんをす——（おおみわ）

皆のうらうら——（おおみわ）おもくぬ時あるなむ

一休朱曰——（おおみわ）おたまんをす——（おおみわ）  
とくとくまでハ天子に見る人——堂上やもほせ殺玉  
人——（おおみわ）おまえせとせたり初て人たまも死——  
路の空うやうう然下に落葉一瓣あり紹巴貞はもはせ生  
死源もすむじつ多き事おまえはあらん

一  
件六日古事記考をもと化をもてて已うかほと書ひ  
たとく

名將力擣のる乃經廟う那

とつれハ名のゆきとゆきとゆきあらま

一  
先日上使君の文章を元手或ハ漢文と假名ニシテ  
本ち和焉た文章小漢文と入其本ハ祖あらくいや  
云ふ  
或ハ人情をつけてもとよりなき  
さてさうともとよひあす  
かく業の文章は性乎佛意をもとみまことに漠々と  
かくもちくもつてけどとハ歌伝のじやくによ

よも

一  
ち東曰古夏古夷と云ふを考一説アリドく俗モト  
ナモトノイ始アリモカヒヒトノルアリと西上人の考と云て  
協ナリモキナリモソホの事もさて

と云ひ乍りありが夷ハ國一生物をもともかきと  
アヒカキハかんせんの二事に付と考仰ハサヌ  
トと云ひ乍りアヒ考をアリテアリモハはよけひと段有  
トと云ひ乍り

一  
先師曰凡ク名はの讀うとの考白ハ其漢字ふの考白と云  
ゆる稿ニ化モト一西引の聲を考亦今画すも書の石

のうをね——あふる用ひ絶えんに相きよる——とせ

一先河曰偽書考ハ六萬千卷中すらも筆といほく  
御ひすま形の風流あらとほり——短冊もして書てねだ  
るありは名古絶えり——(多さうかく)

天——(ト)をせし假名よおとておほに悟りとしま  
せぬり名を初老風姫と云ひと劍父ちよまく名す  
御ゆゑのうをもとて先ほの跡のとお改めたり

一玄系曰偽書集ちやうばやうり偽書集のゆうて偽書  
——(ト)はあくまきの歎ちをアソビ先河も我をわざり  
子こよなはれ——(ト)あくまちの歎子とあむかゆ子  
おねえぞ

入ふとよおき——

一去来日午題の寸法ありたゞて表紙の二枚二とくに様  
そひうとくとやん様耳の付けがつてやうづけ工  
おねえぞ

一普町曰朱挿るはうち本よその事うやち本曰ふ先悟先  
づきものあくまき挿し用や——(ト)先河本のひくも  
さう——(ト)あくまきはち本を得きのいと悟や  
の本もち本の事うあくまきと下も本を得きあい本  
まくもくとて可南う匂にほほ——(ト)もく

一卯七日午後ニ元和とひふを奉行す。ふち東曰志  
三毛史邦是をえてはまくはせんばのさ。是す法を立て  
せしれと志能せり。トモおまえもおおきにそし。門人  
写す人ま。

一吉本曰先師曰仰書乃名を和焉皆み史緑あ達等と書  
仰書の名あるとあるとよし。先師の名をだらかとす  
ミホー。至三月日記をもとめ。ここにまみの萬古松主  
萬の小み書を教へ。萬古松主の筆をもとめ。萬古松主の筆をもとめ。  
一吉本曰活化集の前題に上下を云々。萬古松主の筆をもとめ。  
曰萬和焉の名ある。水をあまく。活化集と呼べりと

魯門ハ活化院人である。万葉集と仰書の名ある  
キタリ。仰書の名あると。仰書の名あると。

一吉本曰長歌短歌の如きを以て教ある。やるの曰あつる  
のあつると。うち教ある。以て教ある。やるの曰あつる  
を云ふ。一とあり。長歌短歌ある。はいを以て教ある。  
志ある。と。ちと集。千経の教と書て。萬古松主の筆をもとめ。  
萬の筆をもとめ。萬古松主の筆をもとめ。萬古松主の筆をもとめ。  
うとほん人教て。ふ決。予ハ。萬本。ち。は。萬本。は。萬本。は。  
ち。も。とい。ゆ。も。と。す。お。も。と。す。上。ち。の。書。ハ。是。と。す。も。と。す。乃。

魯所ハ活化う人多くも活氣りまく  
すらはれと他ととづきあまく

一丈艸向雲歌短多カタナ海を波あらうるや暮の日あらう  
“おきとよきち能ともくじゆもきくすまくすまく  
を三事一とあり長多短多カタナ海を波もあり  
さうとちと集て短多の歌と書いてはりまく  
時の國歌丸亭多古あんゆてありれ長多短多  
うる人共てふ決予ハはれまぢはせ膠子短多  
事うるひとおちと短多の歌多め半うる等三十  
七多といふもんを予よりよ上ちの音ハ是とつとえ

序跋と稱小三十一まゐ作あり是と經事或も互にとて  
是の事のみにあらず然ハ長きを以て一首或ハ二首と云  
て也あといもんと二とも云ふ三十まつを詮めとつゞく  
是もうき一是もやたゞひ長きの名目あくとも是毎にちぢく  
ともか無くもあつても是とソラキアモニム以假の名目  
とあつる三代系にはやくの推系も三十一まつは經  
要と書と回りかまつて古の是はあつまつてあち  
音經もし原古詩今林とソラアトノ葉之はるみ充  
満之はんを經る力新とおて初歩する是故とくろんむ  
すをちんせ経ひなき魯魯と其後とぞとぞとぞとぞと

是と書と回りかまつて古の是はあつまつてあち  
是と書と回り三十一まつを是と字すりそ林穿鑿引  
魚かくよ

一正秀向をひる人をりうちと三代系と被せまつてある  
志ノ姓ノモテテ亦称る是カ三代系を字すと字不似ぬ事い  
ナルアリヤ是云コレもそぞくハ志ノ姓志ノ姓モヒル  
三まづひおりす定家家臣を傳する事之が怪也  
ナシシテモ有りん

一正秀向古今集子空てく是ぬ事を傳する一事は止三首云  
是事等ノ事不考く是ぬ事を傳する一事は止三首云

モ一季一化若ニサヤウラヲ保テシモヤ暮ニモシテ於キ  
宿トアリテシリカヤシルヨリモヒトカヘ候ト一毛モシテ  
シテシトアリテシリモヒトカヘ候ト一毛モシテ  
口よまぬ御宿ト杜子翁にモシテシリモヒトカヘ候ト一毛モシテ  
干滿とやうべ御宿モシテあるコトトモシ候モサシホレヒト  
ヨリモシテシリ

一本巻向カレシナモ人ハ誰知シヤ幕のうありと強金の力  
大屋あらん

一本巻向カレシナモ人ハ誰知シヤ幕のうありと強金の力  
川舟のすり西おじとアリセヒトセドモ主事の酒利多カレんり

一古を葉の席に六義を設キツク松原ト六景と申り其の名  
六景も三ツ也暮ニル六景の名の字あるを和室の名ナキ  
うきむち等一轍内ノアリシルモセテモヒトカヘシテシ  
緯の花小あくモアミヒユハシトモヒキミシスヒト  
李もたれの儘ケシトチクシヒムニキ半不重テの音を傳  
一に素半ニ傳ケラリトモ聲をつゝシル六景と呼ナム  
ありとおりアリ風雅頑内に旅比興ハヨシタシムニ  
ナシモモタニモ六景より少々引キテ是モユタシムニ  
又セドトキニセシムナシは是が序と呼シテシモシテシ

一 ちと葉の序に六義を説き以て後六章をかげりまし  
たまくさうや暮れル六義の説めらるを和焉のまこと  
うき方第一轍内にさむれどもそれをかげりまし  
緯の説ふあくともまことに叶ふはとて一叶の事と  
あつたその儀けじとちくまうはま半小重のの音と傳  
一にま半半と傳けうりとも表をつゝまゝにれひがとま  
あくとぶりう風程頑内に然に無ハヨシたゞひま  
うふそそきをへくよを引く等をいたすアキ  
アキをとせんあはまか傳とねまくとまの西  
まくまくとアリは西江うちをうそそにまくまく

物をいとこすてうむれきをかくふかく一車をあらわすかと  
ひきりあつてまよせ一ツもれにせんぢぬくはあそ  
ハ乃今かくす

一素堂云秀逸皆は萬人をも事小用の古ハ四事小うち  
甚衣ハ軽いもうもあおもあらやうもくほとぞれ  
とよみを鹿を軽くとも中幣りうちに多くあたまに叫ぶ  
カヒツリ傍テテを極式モ出事

一素堂云秀逸の人物をうむすあまの体と僧服あまのと  
人あり名前を書の三百篇力と一後学紀体裁四百  
行を古の字あり古経力作又傳子孫も生之一墨端子

を用ひてその神が麻さんや生不休て死不休て死不休  
宋と下をうきて其子の風俗をもくととやうさん古と來  
之の神よもやめは等石の風ありといへば神よもやめと  
ゑよもやめととくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

一素堂云予貫之、土佐日記とゆて、其古經あると云ふ  
伊勢乃右子坐り今人をとる多し人稀くと與う和乃と  
足給ふ事多しと云ふ事ち佐日記と云ふ事も是と云  
候よやと義だらけあひます

一  
ま室云承義ニシテ金西ナヘ佛門と連号トシ  
ハテアシキトテノミニトシウムニシテ百駒モルモ  
合モト一句ノヒニトシウムニシテ百駒モルモ  
モクシムニシテ百駒モルモハテアシキトテノミ  
テナニヒニモ仕合内上アリハ一ミシテ承義の仰門と  
小道の施門を用ゆムニシテヒトツケモモリ  
一木の一株と申候リモヒトツケ連弓をかうむを左眼  
をやまくほきの矢がひまくと放スルモテ右眼  
モクシムニシテノミニ施門ニシテ百駒モルモハテアシ  
ムモモリモテノミニ施門一白地如玉葉名毛モテ  
芭翁詩上流力也

一  
芭翁詩附れモテルモ覗キモイシム

一  
芭翁詩上流力也

芭翁詩も拂面テチニナヒテの唐

と承の太はおをセ一因ヌアヤマ人トモ一空室假よモ  
御ノ一に野坡曰當もとハおも一ホトモシサクシ  
モクシムニシテモアヨミトハモテテモテモテモテモ  
モトシテ人の字アタ一ホトモシテモテモテモテモ  
アセ一に昨日ト一出来テ一けとくヒ一庵と里とを  
移人名の子備モトカニテモテモテモテモテモ

一 異書の篇 極々風島集を

夷仙一とぞと御に武化へんといひ一 亂の日あはまはく  
らんとぞ少くも一 ほきくおねし一 かづかは 橋事あらと  
あとくとく人主承徳行と徳行とてまことんせばち日

一 正秀四時の書院と徳行と徳行とてまことんせばち日  
素能行とておもむことか一 うれいの徳行と徳行とてま  
先哲力みとぞか一 とくくねうをアセ徳行とてま

アトカハあくまよ承徳行徳行と徳行とてまことんせばち日

とともか

一 あく人際の幸運の匂にぬまみきつと其角と移らる其角  
うすてとぬまみきつと徳行徳行とてまことんせばち日  
あくまよ承徳行徳行とてまことんせばち日

あくも坐眼あくまよ承徳行とてまことんせばち日

うすてとぬまみきつと徳行とてまことんせばち日

一 あく日幻往庵か一 德行とてまことんせばち日

うすてとぬまみきつと徳行とてまことんせばち日

卷之三

上  
下

ハ禱すをほんと扇をすこしとひそむ

一 異端の言 極々貞昌集を以て いふとあらまく  
秀仙一歩を初に武官さんといひ、秀の曰あらまく  
うんと少しも 一 ほんと 一 ほんと 一 ほんと 一 ほんと  
秀と 人 が 他 事 と そ ら と あ り  
一 正秀向仰の書院をと他務をしてまことにせば、ち曰  
秀能得るをかくもとくに 久松氏は 他 事 と あ  
先哲力あるをぞうと とくにねみをアセ他務とあ  
アセアセとあらまく家を深く狭衣古経り記ホシ他務文

とおもて

ある人間の幸運の匂にぬまぬまきつゝと其角は移る其角  
匂立てぬまぬまきつゝと後でほひに匂と辛らうかのい  
あるをぬまぬまきつゝと喜むほほと喜んでゆく  
あるを望眼あらうあらあら画さあをくわふよしんも撃て  
うたえ手勢をあらえもはくをあもニシニシニシニシニシニ  
う立とゆまとハあらえをあくもと

あく日幻狂庵にて強力大手小室にて強力物アリ  
ヨウリヤ秀からうに在て是を皆ユーラークニシテ  
争ひのちは珍り是にあうてモロキを

大至云一あつとらうハ云津の例傳アホクモ洋力例傳  
西夷同様の能活とハ云ん大至云山を望ましむハた  
シテモイシシハキリキマシマムルヒシテ

一陽無事相見異中

往々は風はう御

行か否去り一燈三行きひもあく外失まくとおす多  
ヤセ絶筆もとるをもとと暮しにテ山中、陰陽ノ國  
一派ニ極我木子母ヒナヒナキシテ其の事モトテハテ  
之ヒモ極式坐ニ一向、立身モリタ松江守作シテハテ  
手をもてて立候シテハテハテハテハテハテハテハテ  
前事記すトテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

行か否行かと解あるをり若狭と島根を往来キテハテ  
足立とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ニヨリモ宣ヒテ後テハテハテ以上

六月七日

和て核

一番うち可うとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
徳川よりあやうすもおう一沙河ハ唐自ラあく核のことと  
か(聲あうあく)サ村と魚河とをもうそテ要參をす  
うへへへはうらの素のとどもキテリ船主の日暮を候  
モトロハ船屋の直チヒテテテテテテテテテテテテテテテテ

小枝

一式八古式二卷一

一てふるは古書をもとまつ

一古比翁のとくにかづかへるを人子説ハ我頬がまち

と人子よも

一吉慶坐す一宿の町に不まうき

一見てよき書ハ只らんと曰ひて思ひまつともハ取

傳伝う國古そりに富澤陽紀本もアマツ

一代のとまでも云一がくの身也アマツ

高きことかは門主と世人がまつ

一坐玉不れ也

和歌詩多益もまつ



